とが数十人いるようです（他のインフォーマントに拠れば200人に近いという発言もありました）。G氏が給与を支払って雇用しているのは，ほんの数名に過ぎませんが，そこにいれば，食事と寝る場所には困らないということで，実質的に無給状態で労働に従事しているカメルーン人もかなりいるとのことです。彼らはその間に某かの仕事を探し，就業していきますが，G氏を中心とするコミュニティは，故郷カメルーンを離れた彼らにとって唯一頼っていける場所にもなっているようです。

このようにして，六本木という華やかな繁華街で働くナイジェリア人と，自動車工場を中心としたカメルーン人の2つのコミュニティの事例を提示しました。しかし，来住アフリカ人を取り巻く社会環境はさらに複雑です。今後のフィールドワークで重要になる3つのアクターの社会関係を確認していきたいと思います。

はじめに，在日各国アフリカ人協会です。現在までにガーナ，ウガンダなどいくつかの国を単位とするグループが形成されていることが確認できています。こうした在日各国アフリカ人協会は，大使館主導である場合，民間人主導である場合，民族別のグループなど，それぞれの状況に合わせた組織作りが行われています。在日各国アフリカ人協会の中には葬式講などの互助システムを備え，自助的な性質を帯びていることが多いようです。

次に，市民社会との繋がりです。既に在日外国人支援を目的としたNGOは数十年の歴史を持っています。しかし，在日アフリカ人を対象とした活動は未だ殆ど見られません。現在，私自身が共同調査を行っている（特活）アフリカ日本協議会（AJF）は，来住アフリカ人のHIV/AIDS問題に着目し，啓発プロジェクトを開始しています。現代社会における市民社会はひとつの主要な社会アクターとして捉えねばならず，本調査でもその動きに着目していきたいと考えています。

最後に，さらにプライベートな関係性についても言及しておかなければなりません。現在の来住アフリカ人の男女構成を考えると，圧倒的に男性が多いことが他の在日外国人と異なる点であると思われます。結果，日本人女性との婚姻や交際は日常的に見られる現象です。現在，すでに結婚後のさまざまな問題が顕在化し始めており，こうしたジェンダーに関わる課題についても十分にまなざしを向けておく必要があると考えています。

以上，『来住アフリカ人のコミュニティ形成と生活』と題する本研究のこれまでの経過と今後の展望について述べました。未だこの領域の研究蓄積は少なく，さらに，ミクロな人間関係とマクロな経済・政治状況が入り乱れる現象は，簡単には捉え切れません。現在，来住アフリカ人の問題を理解するために必要なのは，民族誌的記述を積み重ねていくことです。すなわち，フィールドワークにより，多くの個人のストーリーを集積して，より微細な問題系統を縒り合わせていく作業が重要だと考えています。

平成22年度長野県諏訪大社御柱祭準備でのフィールドワーク

石川俊介　　文化人類学・宗教学・日本思想史専門　後期課程1年

長野県諏訪地方で行われる諏訪大社御柱祭（以下，御柱祭）は，6年毎，寅年と申年に行われる祭りである。長野県諏訪郡の諏訪大社氏子（一柱に付き2,000人以上）が，御柱と呼ばれる樹齢200年前後の樅の大木を社まで曳行し，社の四隅に立てる。御柱祭は，1,200年以上の歴史をもち，一度の断絶もなく行われてきたと言われる。近年，御柱祭は，平成10年（1998）長野冬季オリンピック開会式で紹介されるなどしたことで，全国的に知られるようになり，平成16年（2004）には約178万人の観光客を集めた。

報告者は，この諏訪大社御柱祭について，博士課程前期1年次より断続的にフィールドワークを行ってきた。その中で特に，平成16年（2004）度御柱祭について参与観察と聞き取り調査を行い，その成果をもとに修士論文を執筆した。また，断続的に諏訪地域で祭礼調査や資料収集を行ってきた。今後は，次回平成22年（2010）度御柱祭に向けた準備に関するフィールド調査に加え，さらに視野を広げ，多角的に現在の

御柱祭の姿を捉えていく予定である。

1．御柱祭準備に関するフィールドワークの意義

御柱祭は，早くから考古学，民俗学などに注目され，その研究蓄積は膨大であるが，フィールドワークをもとにした民族誌的な調査はほとんど見当たらない。これまでの御柱祭に対する研究は，その起源・由来に関するものに限られる傾向がある。なぜなら，御柱祭の起源・由来については謎が多く，研究者はその解明に惹きつけられていく傾向が強いためと考えられる。現在でもこの傾向は続いており，多くの研究者が御柱祭の謎の解明に心血を注いでいる。また，6年1度という周期が，民族誌的な調査を困難にしていると言える。さらに，祭礼を捉える上で重要である祭礼組織が複雑であるため，調査の取りかかりを見つけるのがむずかしく，フィールドワークを困難にしているのである。

よって，先行研究においては，祭事日程を記述するに留まるものが多く，準備の過程を綿密に記述するなど，長期のフィールドワークに基づいたものはほとんどないと言える。故に，報告者の行う，準備から祭り当日までのフィールドワークがもつ意義は小さくない。

まず報告者は，諏訪大社上社御柱祭に世襲で奉仕する「木作り」と呼ばれる集団の調査をはじめとして，祭礼組織の把握を行い，祭り当日までの参与観察を行う。次に，御柱祭を取り巻く社会状況の中で，御柱祭で使われる御用材に注目し，地元住民の取り組みや林野庁のプロジェクトの成果を調査する（→2.）。さらに，御柱祭が諏訪の祭りという文脈を離れ，ひとつの「文化」として発信されていく状況を調査・考察する（→3.）

2．御柱祭御用材への取り組みと林野庁「木の文化を支える森づくり」活動との関係

平成19年（2007）は，平成22年（2010）度御柱祭に向けた準備が本格化する年である。その準備の中で最も重要なのは，御柱となる御用材の調達である。報告者のひとつの調査テーマは，この御柱となる御用材（樅の大木）の調達・伐採についてである。諏訪大社は，古くから社有林を抱え，御柱となる御用材は全てそこから調達されてきた。しかし，昭和34年（1959）に襲来した伊勢湾台風によって，次世代の御柱となるはずであった諏訪大社社有林の樅は大きな被害を受けた。この影響のため，近年は御用材不足が深刻となり，平成16年（2004）御柱祭では，御柱祭が始まって以来はじめて諏訪地方以外から御用材が調達された[1)]。

このような現状の中で，地元住民は樅を育成するための植林活動や，森林整備活動を行っている[2)]。また，平成14年（2002）度から林野庁は，「木の文化を支える森づくり」活動を始め，諏訪地域においても下社御柱御用材調達地である，下諏訪町の東俣国有林が指定されている[3)]。この活動は，森林管理局と地元住民や自治体との連携をもとに，木の文化の継承に貢献することが謳われている。報告者は，諏訪地域におけるこの活動の成果を調査するとともに，指定外となっている上社社有林の現状を調査する。

また，視点を転換すれば，御用材不足は諏訪地域以外への関係性の広がりとも捉えられる。平成16年（2004）御柱祭では，上社の御用材が伐採された長野県北佐久郡立科町より，神輿が御柱祭に参加した。このように，今後も御用材調達地と諏訪地域との交流が広まっていく可能性がある。

3．諏訪の「文化」としての御柱祭

御柱祭は諏訪地域を巻き込んだ一大イベントであり，諏訪を象徴する行事といえるが，近年は御柱祭の主要な行事である御柱の曳行が，御柱祭から離れた場所で行われるようになっている。

平成18年（2006）10月，愛知県名古屋市の市街地で樅の木ならぬ，檜の曳行が行われた。これは，名古屋市が計画している名古屋城本丸御殿の復元に使用する木曽檜を市民にお披露目するイベントでのことである。この時に特別参加したのが，諏訪の御柱祭に関わる氏子有志の団体であった。彼らは，御柱祭と同じ掛け声で，見せ物として檜を曳行した[4)]。

このような行為は，ひとつの「文化」の発信ともとらえられ，これまで見られなかったものである。報告者は，このような祭りの文脈を離れ，一種の「芸能」となっていく過程を記述していく予定である。また，同様な木材を曳行する祭り（伊勢神宮遷宮祭など）についても調査を行いたい[5)]。

注

1）この時調達されたのは，上社御柱祭の御用材8本である。
2）長野日報2006年5月22日，長野日報2006年7月3日より。
3）http://www.kokuyurin.maff.go.jp/press/2004/Kokuyu_Press_28.html，http://www.chubu.kokuyurin.go.jp/syoutaijyo/bunka/index.html から2007年3月6日情報取得。
4）毎日新聞（名古屋版）2006年10月11日より。
5）木材を曳行する祭りは日本各地で見られるが，それらの共通性や類似性を論じた研究はほとんどみられない。